

# 接触場面初対面会話における話題スキーマ

—日本の大学における留学生と日本人学生の会話からの示唆—

関崎 博紀

## 要 旨

本研究では、接触場面の初対面会話において話題となる事柄を分析した。そして、複数の会話に共通して、留学生の出身、日本滞在、大学生活など話題になりやすい特定の事柄があることを明らかにした。このことから、接触場面の初対面会話においても話題スキーマが存在する可能性を指摘した。これらの話題は、大半が日本人大学生によって導入されていた。以上の結果にもとづき、接触場面の話題に関する知識を持つておくことで、日本人との接触開始に対する不安を減らす可能性があることを論じた。  
【キーワード】 接触場面 話題スキーマ 留学生 大学生 会話

Topic Schema at First Meeting of Contact Situation :  
implications from conversations between Japanese  
students and foreign students at a Japanese university

SEKIZAKI Hironori

【Abstract】 This study analyzed the topics in conversations in contact situations. As a result, it is revealed that things such as the place from which the foreign students came, staying in Japan, campus life and so on tend to be the topics regardless of the group. On the basis of this data, topic schema in contact situations is pointed out. Furthermore, these topics were found to be introduced by Japanese students. Based on these results, the possible usefulness of introducing topic scheme for reducing anxieties, which foreign students have about conversations with Japanese students is discussed.

【Keywords】 contact situation, topic scheme, foreign students, university students, conversation

## 1. はじめに

本研究では、日本語の母語話者と非母語話者による、いわゆる接触場面の会話において、話者の属性や会話の組み合わせによらず共通に取り上げられる話題があることを指摘する。

研究のために日本に留学してきた日本語学習者からは、よく日本人の学生と「友達になりたい」「交流したい」「おしゃべりしたい」という声が聞かれる。つまり、研究の相談や依頼などの特定の用件を済ませるためだけに話すのではなく、雑談をして相手のことを知り、自分のことも知ってもらいたいということである。初級の前半を終えたあたりから、話したいことを表現するための語彙や文法を備え、それらを組み合わせてまとまった談話を構成できるようになる。そして、学習者同士では、日本語を使って雑談を楽しむことも増えてくる。それにもかかわらず、日本語の母語話者と雑談してみると、積極的に発話できない者が少なくない。その原因を尋ねると、「何について話せばいいかわからない」「どのような話題が適切なかわからない」という声が聞かれる。

このような問題を解消する一助とすべく、接触場面の会話における話題スキーマを明らかにすることが本研究の目的である。

## 2. 本研究の位置づけ

従来、話題の研究では、話題間の結束性や展開、移行の構造、方法などが盛んに研究されてきた(例えば、村上・熊取谷1995、楊2005、2011、今田他2012)。これに対して、本研究は、そもそもどのような事柄が話題となるかを分析する。

会話の中で何が話題になるかを明らかにした研究に、三牧(1999)、熊谷・石井(2005)がある。三牧(1999)は、日本人大学生同士の初対面会話を38組録音、分析した結果、話題スキーマが存在することを指摘した。すなわち、話者の属性や会話の組み合わせにかかわらず、日本人大学生同士の初対面会話において、大学生活や所属のことなど、共通に取り上げられる事柄があることを明らかにしている。さらに、会話の流れの中で話題を選択するストラテジーも分析されている。一方、接触場面では、母語場面とは異なる話題が取り上げられる可能性がある。このような問題意識から、接触場面の会話における話題スキーマの可能性を指摘する点が本研究の特色である。

熊谷・石井(2005)は、日本人と韓国人を対象に、出身地や年齢など、19項目について、相手との親疎、性別の異なる4つの場面のそれぞれにおいて、どの程度話題として取り上げたいかをアンケート調査している。そして、趣味、余暇、スポーツ・テレビ番組などの話題が好まれるのに対して、体のサイズ、宗教、収入などは望ましくない話題とされていることなどを明らかにしている。本研究とは、データの性質が異なるが、話題として取り上げたくないという意識も明らかにしている点は、実際の会話では明らかにしきれない部分であり、本研究の結果に対する考察の際に有用である。

### 3. 方法

#### 3.1 会話資料に関して

会話は、全て初対面会話である。日本人学生と留学生に、任意での参加を呼びかけ協力を得た。留学生が会話実施時に在籍していたクラスは、いずれも初級後半から中級入門程度であったが、日本語能力に関する客観的な指標を得るため、J-CAT<sup>1</sup>を受験させた<sup>2</sup>。このレベルの学習者に協力を呼びかけたのは、文法や語彙力が比較的限られるため、対応できる話題により強い不安を感じると想定され、話題スキーマに関する情報をより必要とすると考えたからである。

会話参加者と会話に関する情報を表1にまとめる

表1 本研究の会話参加者と会話に関する基本的情報

会話の実施時期		2013年6月	2015年3月
参加者	留学生	人数 6	3
		来日時期 2013年4月	2014年10月
		レベル 初級後半～中級入門	初級後半～中級入門
		出身地域 欧州(2)、南米(2)、 中米(1)、東南アジア(1)	南米(1)、中央アジア(1)、 東南アジア(1)
		身分 日本語研修生(6)	特別聴講学生(短期留学生)(3)
		日本人の友人 あり(6)	あり(2)、なし(1)
日本人	人数	3	3
	学年	4年生(3)	4年生(2)、2年生(1)
	接触経験	いずれも20人以上	いずれも20人以上
1 会話(組)あたりの人数		3(留学生2×日本人1)	2(留学生1×日本人1)
会話の時間長		15分	10分

注：( )内の数字は該当する人数

2013年6月と2015年3月の各時点で参加した留学生は、それぞれ同じクラスに在籍していたが、専門は異なっていた。日本人学生は、結果的に4年生が多く集まった。専門は、日本語学・日本語教育、体育や比較文化など多様であった。会話参加者数もしくは時間長は、留学生の心的な負担を考慮して調整した。2013年6月には、留学生2名対日本人学生1名による15分の会話とした。2015年3月には、1対1の会話としたが、会話の時間を2013年時よりも短く10分とした。

日本人学生、留学生をそれぞれ別室に待機させ、留学生にのみ事前アンケートの記入を依頼した。事前アンケートでは、日本人の友人の有無、日本人との会話で想定される話題に関する知識を確認した。その後、会話開始時に両者を引き合わせ、会話を開始した。当該の会話で選択される話題への影響を避けるため、会話開始時には話し方に関する研究と伝えるにとどめ、研究目的は、会話終了後に明かした。ICレコーダーで録音を開始し、

筆者はその場を離れた。

会話終了後、日本人大学生、留学生の双方に事後アンケートを実施した。共通の質問として、会話が録音されていることをどの程度意識したか、意識したとしたら、それが話し方にどのように影響したかを尋ねた。また、個別の質問として、日本人大学生には、接触経験の有無、人数、留学生と話す際に気をつけていること、会話の中で失礼に感じたことがなかったかなどを確認した。留学生には、普段どの程度日本人と話す機会があるか、どの程度難しいと感じているかなども確認した。事後アンケートの結果、録音を多少とも意識した協力者はいたが、そのことが話題の選択に影響すると判断される回答はなかった。また、日本人学生は、いずれも会話の中で相手が失礼だと感じる事がなかったと回答した。

### 3.2 会話資料の作成と話題の認定に関して

録音した会話は、BTSJ (宇佐美2011) に従って文字化した。BTSJでは、読みやすさを考慮して、漢字仮名交じり表記を採用している(本研究の会話資料に用いた文字化の諸記号は、本稿末尾の記号凡例を参照されたい)。なお、次に述べるように、話題の認定には、話者の声の調子が重要になることがある。そのため、可能な限り、パラ言語情報や、音声に関わる非言語情報を文字化した。

次に、会話資料から話題を抽出した。話題の定義や概念は、研究者によって様々だが、本研究では、三牧(1999)に従い、会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体に共通する概念とした。三牧(1999)を援用したのは、接触場面の話題の特徴を明らかにするうえで母語場面と対比することが有用だからである。話題が内容的な結束性から定義されるため、その認定も、原則として発話の内容面から行う。ただし、会話参加者の言語行動も手がかりとした。すなわち、相手の発話内容を受け止めたことだけを表し、実質的な内容は持たない発話(日本語で言えば「うん」「そう」など)や、笑い、相手の発話の繰り返しなど、最小限の反応(minimal response, McLaglin and Cody 1982)が観察された場合や、相対的に長い沈黙が見られた場合などは、内容が一旦そこで途切れ、それ以上展開しないことが示唆される。そこで、これらの手がかりも利用しながら話題を認定していった。

### 3.3 分析の観点

本研究では、接触場面の会話で話題にされる事柄を明らかにする。そのために、まず抽出された話題自体を分析した。また、その特徴を明らかにするため、母語場面での話題、もしくは話題になりにくい事柄との対比も行った。

まず、抽出された話題を4つの観点から分析した。分析の1つ目として、1会話あたり

の話題数を分析した。2つ目に、抽出された話題をリスト化した。リスト化にあたって、本研究での話題の捉え方を整理しておく。話題は、線状構造的にも、階層構造的にも捉えられる(村上・熊取谷1995:106-107)。線状構造的とは、話順交代のシステムを基本として隣接対の連続として話題を捉える見方である。一方、階層構造的とは、複数の関連するトピックがより大きなトピックとしてまとまりを形成するという捉え方とされる。本研究では、話題を階層構造的に捉え、特定の話題を大話題、その下位話題を小話題と呼ぶ。そして、大話題に付加するラベルを話題項目と呼ぶ。この大話題、小話題、話題項目という発想及び名称も三牧(1999)を援用しているが、その目的は、やはり母語場面との対比の便宜にある。大話題、小話題の例を本研究の会話から挙げると、日本滞在中の「旅行」の話題が大話題に該当し、その中で展開される、京都、東京などの具体的な地点での話題が小話題に該当する。次に、分析の3つ目として、各話題の導入者を調査した。この情報は、話題に関する指導の際に重要である。例えば、留学生が各話題をどの程度率先して導入すべきなのかの指標にできる。導入すべき場合、会話の相手に違和感を与えないよう、どの程度話題のカテゴリーに敏感になるべきなのか検討できる。逆に、話題がもっぱら日本人学生によって導入される場合、その話題に、ひとまずは対応できるように備えておけばよいというような示唆も得られよう。従来の研究では、接触場面会話での話題は、言語能力の高い方が多く導入するとされる(van Lier and Matsuo2000)。そのため、本研究でも、話題は日本人学生が導入することが多いと予想される。最後に4つ目として、各話題がどのような観点から進行することが多いかも調査した。

次に、接触場面の話題の特徴を分析する。そのための分析として、母語場面の話題リスト(三牧1999)と比較した。次に、話題になりやすい事柄の特徴を明らかにするため、熊谷・石井(2005)の結果を参考にしながら、話題になりにくい事柄とも対比した。

## 4. 結果

### 4.1 抽出された話題

#### 4.1.1 話題数

抽出の結果、1会話あたりの平均の大話題数は18.2であった。会話の時間長が10～15分であったことから、平均的に1つの話題が1分間持続していなかったことになる。話題数は、最も多い組で22、最も少ない組で13、観察された。

#### 4.1.2 話題項目

次に、話題項目のリストと選択率を次頁の表2にまとめる。抽出した話題は「話題項目」欄にリストアップしている。各話題は、三牧(1999)を参考にしつつ、内容的な関連性からカテゴリー化している。選択率は、全組数6に占める、当該の話題を選択した組の割合

である。一度取り上げられた話題が、いったん終了した後、時間をおいて、再度同一会話内で取り上げられることもある。その場合も、話題の内容は同一のため、先行する話題と合わせて1つとしてカウントしている。

結果として、43の話題項目が抽出された。中でも、専門分野に関することは、全ての組で取り上げられていた。また、出身地や日常生活の話題も、5つの組で取り上げられていた。一方で、1つの組でしか取り上げられていない話題項目も見られた。抽出された43の話題項目は13の話題カテゴリーにまとめられた。そのうち、留学生の出身や、日本滞在、専門、大学生活に関わるものは全ての組で取り上げられていた。一方で、交友関係、食べ物、趣味、居住などは、2つの組で取り上げられるのみであった。

表2 本研究の会話に見られた話題のリストと選択率

話題カテゴリー	話題項目	選択した組	選択率	話題カテゴリー	話題項目	選択した組	選択率
出身		6	100.0	気候		3	50.0
	出身地	5	83.3		気候	3	50.0
	母語	4	66.7		季節	2	33.3
	出身地事情	3	50.0	共通点		3	50.0
	同郷出身者	2	33.3		共通の知人	2	33.3
日本滞在		6	100.0		共通体験	1	16.7
	来日	4	66.7		SNS	1	16.7
	予定	3	50.0		昔話	1	16.7
	旅行	2	33.3	言語学習		3	50.0
	体験	1	16.7		日本語	3	50.0
専門		6	100.0		日本語以外	2	33.3
	分野	6	100.0	交友関係		2	33.3
	専攻	1	16.7		日本人	2	33.3
	テーマ	1	16.7		外国人	1	16.7
大学生活		6	100.0		恋人有無	1	16.7
	日常生活	5	83.3	食べ物		2	33.3
	休暇	2	33.3		お茶	1	16.7
	試験・単位	1	16.7		日本食	1	16.7
	キャンパス	1	16.7	趣味		2	33.3
	学校行事	1	16.7		お茶	1	16.7
	所属		5		83.3	映画	1
身分		4	66.7		アニメ	1	16.7
学年		2	33.3	漫画	1	16.7	
大学		1	16.7	居住		2	33.3
専攻		1	16.7		現在居住地	2	33.3
進路		3	50.0		自宅／下宿	1	16.7
	進学	2	33.3	その他		3	50.0
	夢	1	16.7		目に入ったもの	2	33.3
					国イメージ	1	16.7

#### 4.1.3 話題導入者

大話題の導入者と回数を調査した結果、1会話あたりの平均は、日本人学生が11.3回、留学生が6.8回であった。1つの組を除き、日本人学生の方が話題導入回数が多いか、同じであった。これは、表2の話題リストには、日本人学生からの影響が比較的大きいことを示している。なお、留学生の方が多く話題を導入していた会話では、日本人学生が8回、留学生が16回導入していた。

#### 4.1.4 各話題の観点

各話題を進める際の観点にも、傾向が見られた。例えば、日常生活に関しては、困っていることやトラブルが確認されることが多かった(例1)。気候に関しても、夏の蒸し暑さ、もしくは冬の寒さや風の強さなど、留学生の出身国と異なる気候が、留学生にとって厳しいものだという観点から話題が進むことが複数の会話で見られた。例2では、このような観点を日本人学生が志向している例を示す。また、日本語学習に関して、どこが難しいかを話すことが複数の会話で見られた(例3)。以下に示す例では、日本人学生をJで、留学生をFで表し、それぞれ任意の番号で個人の違いを表す。なお、書式は簡略化している。

例1では、日本人学生から、生活に慣れたか否かという話題が導入されている(1行目)。留学生から明確な答えが得られない(2、4、6行目)のに続き、J1は再び確認の発話を行う(7、8行目)。その際、「トラブル」という外来語を用いたり、「大丈夫」というより平易な単語を用い、単純な構造の文で確認をしたりしている。また、依然として留学生(F2)が理解に問題があることを示す(9行目)と、J1は10行目でも表現を変えて、生活に関する問題を確認している。そして、その結果、留学生からは、明確な答えが引き出されている(11、12行目)。

例1 日常生活に関してトラブルがないかという観点から話題が進む例

- 1 J1: え、もう生活には慣れました?。
- 2 F1: うんうん。
- 3 J1: まだまだ。
- 4 F1: まだまだ<笑い>、多分<笑い>。
- 5 J1: 多分[↑](うん)、大丈夫(うん)。
- 6 F1: 慣れるかどうか分からない<笑い>。
- 7 J1: あまり、トラブルはない?。
- 8 J1: <大丈夫>{<}?。
- 9 F2: <は>{>}?。
- 10 J1: あまり困っていることはない?。

11 F2: あ、大丈夫です。

12 F1: 大丈夫です。

このように、J1は、留学生が生活上で問題点を抱えていないかという観点から話題を進めている。

次の例2では、気候の違いについて、初めは楽しい経験という観点から話題が進行したものの、次第に大変なことという観点を移行していくやりとりを示す。初めにJ6から季節に関する話題が導入される。そして、その話題の中で、F6は、日本に来て初めて冬を経験したこと、雪を見たのが楽しかったことなどを話す(8、9行目)。そして、その経験が楽しいものであったこと、驚くものではなかったことなどが確認される(10~17行目)。その後、J6から、冬の寒さという観点が提示され(18行目)、留学生もそれに応じて冬が寒かったこと、風が強かったことなどを話す(19-23行目)。冬に関するこれらの発話が否定的な意味合いであったことは、続く24行目で「でも、夏は大丈夫でしたか」と肯定的評価が対比的に述べられていることから判断できる。

例2 気候の違いと日本の気候の大変さという観点から話題が進む例

- 1 J6: インドネシア、は、今、ん、夏??、ですか?。
- 2 F6: ああ、インドネシアでは、んとー、1年間<笑い>が、
- 3 J6: 同じ?。
- 4 F6: 夏<笑い>。
- 5 J6: ああ、そっか。
- 6 F6: ええ、うん。
- 7 J6: なるほど。
- 8 F6: えとー、冬は、ほんとに初めて(ああ)です。
- 9 F6: でも、あーん、雪が、えとー、初めて、あんー、見る(ああ)ことができましたから、あー、楽しかった<笑い>。
- 10 J6: 楽しかった<笑い>。
- 11 J6: 驚きましたか?<軽く笑いながら>。
- 12 F6: あー、
- 13 J6: そうでも<ない>{<><軽い笑い>。
- 14 F6: <あまりー>{>}。
- 15 J6: なるほど。
- 16 F6: はい。
- 17 J6: そっか。



- 18 J6: もう、「大学所在地」の冬は寒かった,,  
19 F6: はい<笑い>、<寒い、寒い>{<}。  
20 J6: <ですよね>{>}?。  
21 F6: 風が (うーん)、<すごかった>{<}。  
22 J6: <風がすごいから>{>}。  
23 J6: そうですね。/少し間/  
24 J6: でも、夏は大丈夫でしたか。  
25 F6: 夏?。  
26 J6: 日本の夏。

母国との違いは必ずしも否定的なものではないが、例2では、日本人学生の側から、困ったこと、大変だったことという観点が導入されている。

次の例3では、参加者双方が困ったことについて話すことを志向していることを示す。まず、J4が「困ったこと」、「大変だと思ったこと」を尋ねる(1行目)。F4は、その例として、「言語」を取り上げる(2行目)。そして、難しいと感じられる原因や今後の見通しを説明する(5、6、8行目)。それに対して、J4はしきりにあいづちを打ったり(5、7行目)、理解を示す発話を行ったり(3、9行目)している。

### 例3 言語の難しさという観点から話題が進む例

- 1 J4: なんか、そうだなあ、一番困ったことというか(うん)、大変だと思ったのは、  
    どんなことがありましたか。  
2 F4: ああ、それは、言語ですね<笑い>。  
3 J4: 言語、ああ、言語はまあね。  
4 F4: <笑い>はい。  
5 F4: 日本語は(はい)、ポルトガル語と、全然違うから(うん、うん)、ほんとに難しい、  
    と思う。  
6 F4: だから、ちょっと、怖かった<軽い笑い>。  
7 J4: ああ。  
8 F4: まあ、今は、まだ勉強しますから、大丈夫と思う<軽い笑い>。  
9 J4: はいはいはい。

例3では、「困ったこと」、「大変だと思ったこと」は日本人学生から提示され、具体的な内容は、留学生から説明される。その間、日本人学生は、聞き役に回っている。これらのことから、例3では、両者が、留学生にとっての言語学習の大変さという話題で話すこ

とを志向していると考えられる。

しかし、大変なこと、トラブルという観点からばかりではなく、日本滞在の話題のうちの旅行に関することや、趣味に関する話題では、どのような点が楽しかったか、他に楽しいところはどのようなところか、という観点から会話が進行することも複数の組で共通して観察された。

## 4.2 接触場面の話題の特徴

### 4.2.1 母語場面との対比から

次に、母語場面との比較を通して、接触場面の話題の特徴を示す。母語場面の話題リストは、三牧(1999)を参照した。比較の結果を表3にまとめた。

表3 接触場面と母語場面の話題リストの比較

話題 カテゴリー	話題項目	接触場面 (本研究)	母語場面 (三牧1999)	話題 カテゴリー	話題項目	接触場面 (本研究)	母語場面 (三牧1999)	
出身	出身地	○	○	気候	気候	○	-	
	母語	○	-		季節	○	-	
	出身地事情	○	-	進路	進学	○	○	
	同郷出身者	○	-		夢	○	-	
	出身校	-	○		就職	-	○	
日本滞在	来日	○	-	共通点	共通の知人	○	○	
	予定	○	-		共通体験	○	○	
	旅行	○	-		SNS	○	-	
	体験	○	-		昔話	○	-	
専門	専攻	○	○	言語学習	日本語	○	-	
	分野	○	-		日本語以外	○	-	
	研究テーマ・ 卒論/修論	-	○	交友関係	日本人	○	-	
大学生生活	日常生活	○	-		外国人	○	-	
	休暇	○	○		恋人有無	○	-	
	試験・単位	○	○	食べ物	お茶	○	-	
	キャンパス	○	○		日本食	○	-	
	卒業式	○	-	趣味	お茶	○	-	
	授業	-	○		映画	○	-	
	サークル活動	-	○		アニメ	○	-	
バイト	-	○	漫画		○	-		
所属	遊び	-	○	居住	現在居住地	○	○	
	身分	身分	○		-	自宅/下宿	○	○
		学年	○		○	通学	-	○
		大学	○	-	受験	受験・塾	-	○
		専攻	○	-				
		学部	-	○				
		学科	-	○				
		サークル	-	○				

表3では、会話の中で話題に取り上げられた事柄項目を○で示し、取り上げられなかった項目は－で示している。ただし、三牧(1999)のリストに関しては、実際のデータや各話題項目の定義が参照できないことから、本研究で抽出された話題が全く観察されなかったとは言い切れない部分が残る。

表3を見ると、接触場面ではしか観察されない話題項目やカテゴリーがあることが分かる。例えば、気候、言語学習、交友関係、食べ物、趣味などのカテゴリーは、接触場面でのみ観察された。また、接触場面と母語場面で共通して取り上げられる話題カテゴリーであっても、接触場面ではしか取り上げられない話題項目が含まれていることがある。例として「出身」のカテゴリーを見ると、母語や、学習者の出身地事情(その土地の習慣や教育事情、有名なところなど)は、接触場面でのみ取り上げられている。一方、受験や出身校、就職に関する事柄など、母語場面でのみ取り上げられる話題項目もあった。

このように、接触場面での話題は、母語場面のものとは異同があることが分かる。

#### 4.2.2 抽出されなかった話題との関連から

熊谷・石井(2005)は、会話の話題として取り上げられたい事柄に関する意識を明らかにしている。それによると、若年層の日本人は、相手の性別に関わらず、自分の家族や収入、身長や体重など体のサイズ、宗教や信仰に関する事柄を話題として取り上げたくないと感じていることが報告されている。また、異性に対しては、結婚に関する事柄や恋愛・異性の友人に関する事柄も避けられる傾向が指摘されている。

熊谷・石井(2005)は、必ずしも接触場面を想定したものではない。そのため、本研究との単純な比較はできないものの、これらの話題は、接触場面でもやはり避けられる傾向が確認された(表2参照)。ただし、留学生の側から、異性である日本人学生に対して、恋人の有無を取り上げた会話が1つあった(例4)。この留学生は事前アンケートにおいて、日本人の友人がいないと回答していた。

#### 例4 恋人の有無について取り上げられた会話の例

- 1 F5: あの、ちょっと、あ、これは多分、不思議な質問ですけど<笑い>、多分、あ、あの、き、質問してもいいですか?。
- 2 J5: はい、どうぞ。
- 3 F5: 多分ちょっとおかしいな質問だと思いますけど<笑い>。
- 4 J5: 大丈夫です<笑い>。
- 5 F5: 大丈夫ですか?<笑い>。
- 6 J5: はい。
- 7 F5: ほんと?。

- 8 J5: はい。
- 9 F5: 恋人持っていますか?。
- 10 J5: いません<笑い>。
- 11 F5: あ、そうだ(<笑い>)。
- 12 F5: あ、そうですね。
- 13 J5: はい<笑い>。
- 14 F5: すごいですよ、これ。
- 15 F5: なぜかというと、誰かに聞いたら、多分、その友達に聞いたら、持っていますとちょっと、言いますけど。
- 16 J5: ああ、はは<笑い>。
- 17 F5: すごい、これは、ちょっと。
- 18 F5: 私もちょうと、いないと思ったんだけど(<笑い>)。
- 19 F5: すごいですよ(はい<笑い>)。
- 20 J5: いますか?<笑い>。
- 21 F5: いや、私持っていません。
- 22 J5: そうですか<笑い>。
- 23 F5: 私も同じ、そう。
- 24 J5: はい<笑い>。
- 25 F5: でも、私欲しいんですけど(はい<笑い>)、できませんよ。
- 26 J5: できませんよね<笑い>。

F5自身、恋人の有無を話題として取り上げることに何らかの問題を感じていたと考えられる。なぜならば、自らの質問を「不思議な」「おかしい」と形容し、質問してもよいかを数回にわたって確認しているからである(1、3、5、7行目)。J5は、質問を受けた後、しきりに笑いながら応じている。また、事後アンケートでも、特に失礼に感じることはなかったと回答している。これらのことからすると、J5は特に不快感を覚えたとは判断できない。しかし、J5の反応は、「はい」「ああ」などの短い発話か笑いのみである(13、16、18、19行目)。この様子からは、J5は自らの状況を開示することに慎重になっていた可能性が窺われる。

また、他の会話で宗教に関連する話題も観察された。しかし、これは宗教を中心に展開された話題ではなく、各国の昔話についての話題の中で宗教からの影響が話されたものであった。

このように日本人の友人を持たない留学生から、避けられる傾向のある話題が導入された例が1つ観察された。しかし、その他の会話では、熊谷・石井(2005)において若年層

日本人が避ける傾向があると指摘された話題は、留学生にも共通して、取り上げられていなかった。

## 5. 考察

まず、話題の数について考察する。本研究では、1 会話あたり平均して18.2の話題が観察された。この数は、日本人大学生による15分の初対面二者間会話 1 回あたりの平均話題数6.7 (三牧1999: 50) と比べると、かなり大きい。このことから、本研究の会話では、頻繁に話題が変化していたことが分かる。その一因として、会話に参加した学生の日本語能力が考えられる。参加者の日本語能力は、初級後半から中級であったために、1つ1つの話題が長く持続されたり展開されたりしなかった可能性が考えられる。

次に、観察された話題について総合的に考察する。4.1.2で示したように、留学生の出身や、日本滞在、専門（特に専門分野）、大学生活などの話題カテゴリーは、全ての組で観察された。言い換えれば、会話参加者の人数や出身地、専門に関わらず取り上げられていたことになる。本研究では、留学生と日本人学生の人数比が2対1の会話と、1対1の会話という、参加人数の異なる2種類の会話を収集した。人数が増えるほどに、参加者に共通する話題も限られると想定されるが、本研究の結果としては、人数からの影響は見られなかった。このことから、これらの話題を学習者に提示しておくことは、日本人との接触を開始する際の不安を取り除く一助となるだけでなく、実際の雑談への対応を容易にすると考えられる。

また、これらの話題を導入していたのは、大半の場合、日本人学生であった (4.1.3参照)。この結果を留学生の立場から見ると、ひとまずは、話題の導入の方法や転換の方法にまで不安を抱く必要はなく、特定の話題に備えて会話に臨めばよいと言える。このことは、接触開始時の雑談に対する不安を軽減するという点では、利点と言える。

この接触場面会話での話題は、日本滞在、気候、言語学習、交友関係、食べ物、趣味などが取り上げられる点で、母語場面と比べて特徴的である (4.2.1参照)。このような特徴が見られた一因として、「相違点に関心を示す」というストラテジー (三牧1999) が利用された可能性が考えられる。つまり、これらの話題では、地理的、または言語的背景の違いが際立つ。そして、これらの話題が、留学生にとって大変なこと、困っていることという観点から進められる傾向が見られた (例1~3参照)。交友関係や食べ物の話題も、この異なる環境に適応できているのか否かを確認する観点から取り上げられやすい。このような話題の選択の仕方および進め方が観察されたのは、接触場面で、相手が異なる背景を持っているという前提が持たれていたからだと考えられる。

また、日本人学生が話題として取り上げられることを避けがちな項目は、接触場面でもやはり話題化されない傾向が確認された (4.2.2参照)。この結果には、日本人学生の方が相対

的に多く話題を導入していたことも影響していよう。しかし、留学生による話題導入も皆無ではないことを考えれば、留学生の側にも、このような知識があったことが推測される。そして、この知識は、母語で獲得された可能性の他に、接触経験を重ねながら、体験的に身につけていく可能性が示唆される。なぜならば、日本人の友人を持たない留学生に限っては、恋人の有無という、他の会話で取り上げられていなかった話題を取り上げていた(例4)からである。とはいえ、避けられる傾向のある話題を事前に示しておくことは、やはり重要である。それによって、接触を開始する際の不安が軽減されるからである。それと同時に、そのような話題を取り上げることで、留学生が逸脱的であるという評価を受けるのを未然に防ぐことができるからである。

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、日本の大学に在籍する初級後半から中級前半レベルの留学生と日本人学生による接触場面の初対面会話を録音し、そこでどのような事柄が話題として取り上げられるかを分析した。そして、留学生の出身や、日本滞在、専門(特に専門分野)、大学生活に関わる話題が全ての組で観察されたことや、日本滞在、気候、言語学習、交友関係、食べ物、趣味などに関する話題は、接触場面ではしか観察されなかったことなどを明らかにした。また、取り上げられなかった話題についても分析し、日本人大学生の母語場面での意識と類似の傾向を指摘した。そして、上記の結果を留学生に提示することが、接触を開始する際の不安を取り除くのに貢献することを論じた。

本研究には限界もある。まず、協力者が留学生である点である。同じく接触場面でも年少者や生活者であれば、異なる話題が抽出される可能性がある。また、留学生の日本語能力は、初級後半から中級前半に統制されていた。これは、話題スキーマの情報をより必要とするレベルを考えての選択であったが、日本語能力が高まるにつれて、より多様な事柄を話題として会話を進められるようになると考えられる。これらの条件の会話での話題を分析することで、接触場面の初対面会話の話題スキーマをさらに明らかにできる。また、協力者となった全ての日本人大学生は、20人以上という、比較的多くの留学生と接触経験を持っていた。過去の接触経験から、会話を進めやすい話題を明示的、あるいは暗示的に知っていた可能性がある。そのため、接触経験のない日本人学生に協力を仰ぎ、本研究の結果を検証することも今後の課題である。

本研究の出発点は、接触場面で話題に困るという不安を軽減することであった。明らかとなった話題スキーマを提示し、その話題での会話練習を経ることで日本人学生との接触に対する不安がどの程度減るかは、改めて報告したい。

## 謝辞と付記

研究に参加して下さった全ての方々に感謝します。本研究は、旧留学生センターでの研究・調査の承認、及び、筑波大学人文社会系での研究倫理審査で承認を受けています。また、平成26年度人文社会系〈研究・教育・社会貢献〉プロジェクトの支援を受けました。

## 注

1. J-CATは、オンラインで利用可能な日本語能力の自動判定システムである (<http://www.j-cat.org/>、2015年10月1日確認)。テストの詳細は、今井編著 (2012) に詳しい。
2. 本研究に参加した全ての留学生からは結果が回収できなかったが、回収できた範囲では、スコアが150-200程度であった。これは、J-CATでの判定によると、「Intermediate 中級」で、旧日本語能力試験の3級と2級の間に位置する段階である。その他の学生も、同じクラスに在籍していたことから、同程度の日本語能力であることが想定される。

## 参考文献

- 今井新悟編著・赤木彌生・中園博美著 (2012) 『J-CAT オフィシャルガイドーコンピュータによる自動採点日本語テストー』 ココ出版
- 今田恵美・高井美穂・吉兼奈津子・藤浦五月 (2012) 「基本情報交換以降の話題展開ー出会いから始まる会話教材に向けてー」 『日本語教育方法研究会誌』 19 (1) : 52-53
- 宇佐美まゆみ (2011) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese : BTSJ) 2011年版」、<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm>、2015年10月1日確認
- 熊谷智子・石井恵理子 (2005) 「会話における話題の選択ー若年層を中心とする日本人と韓国人への調査からー」 『社会言語科学』 第8巻第1号 : 93-105
- 三牧陽子 (1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー」 『日本語教育』 103号 : 49-58
- 村上恵・熊取谷哲夫 (1995) 「談話トピックの結束性と展開構造」 『表現研究』 62号 : 101-111
- 楊虹 (2005) 「中日接触場面の話題転換 : 中国語母語話者に注目して」 『言語文化と日本語教育』 30号 : 31-40
- 楊虹 (2011) 「中日母語場面の初対面会話における話題開始の比較ー参加者間の相互行為に注目してー」 『立命館言語文化研究』 22 (3) : 185-200
- McLaughlin, M. L. and Cody, M. J. (1982) "Awkward silences : behavioral antecedents and consequences of the conversational lapse", *Human communication research*, vol.8,

no.4 : 299-316

van Laier, L. and Matsuo, M. (2000) “Varieties of conversational experience : Looking for learning opportunities”, *Applied language Learning*, vol.11, no.2 : 265-288  
(<http://www.dliflc.edu/wp-content/uploads/2014/04/all-v11-n2.pdf> 2015年10月1日確認)

**資料：本稿の会話資料に用いた諸記号（宇佐美2011を簡略化）**

□ 発話文の終わりにつける。◻ 発話文の途中で相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするもの。◻ ①日本語表記の慣例の通りの読点。②発話のあいだの短い間（ま）。? 疑問文。?? 確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」。  
/少し間/ 少しの「間」。< >{<} / < >{>} 同時発話されたもの。[ ] 文脈的情報。  
( ) 短く、特別な意味を持たない「あいづち」。(< >) 発話の途中で重なって入った笑い。< > 笑いながらの発話や笑い等。